



合併10周年を記念して、広島県内及び他県からの小・中高の児童・生徒に対する被爆体験証言活動や碑めぐりを通して原爆投下後の広島状況を語り次ぐ活動をしている、広島県高等学校原爆被爆退職教職員の会会長増岡清七氏を招聘し、報告会における平和大使の発表を講評していただきました。

○講評 増岡清七氏

一発の原子力爆弾がもたらした悲惨さ、これがどれほど甚大なものであるか。広島街がなくなつた。しかし今広島街は都市として発展していった。その中には、多くの人の平和に対する強い思いが込められていたことを忘れてはいけない。戦争がいかに人間性をなくしてしまふのか。相手の命を奪つてしまふ残忍性。これらを考えると戦争は絶対にしてはならないと思う。

戦争を止めるためにはどうするか、私たちは日々周りの人々との交流を密にし、広めることで人間との絆を強めていかなければならないのではなからうか。

多くの人が戦争、原子力爆弾について知識を有しているとは思いますが、広島という原爆が落とされた土地に降りて、その土地で肌で感じるこゝとが大切だと思ふ。

発表を聞いていて、平和がいかに大切かということを感じさせられた。そして大切であるということを表していかなければならないと思つていゝ。

多くの人々が安平町から広島においてになつて、平和の尊さ、そして、人間の命の尊厳というものを感じ広めていゝてもらいたい。



報告会での発表はありませんでしたが、婦人団体を代表し広島平和記念式典に参列した稲垣英子さんより寄稿いただきましたので、ご紹介します。

広島平和記念式典に

参列して

稲垣英子

広島平和記念公園には、たくさん鎮魂と祈りの碑が捧げられています。その公園の中心、平和の灯りの前で式典が始まりました。

あの日と同じように青い空、白い雲、暑い日でした。71年前の8月6日8時15分広島上空で原子爆弾が破裂し、太陽熱と同じ位とされる熱線が上空を覆い、一瞬にして阿鼻叫喚の地獄と化し、火事により街は焼き尽くされました。原爆ドームと公園の間に流れている元安川には海水が流れ込み、舐めてみるとしょっぱい味がします。人々は火傷と火

事の熱さから水を求めこの川に飛び込みました。想像するのも恐ろしい、その川に架かる橋の上を私たちは歩きました。気温36度、熱さは足元から昇ってくるようでした。被爆の語り部 塩治さんは、戦争の本当のおそろしさは人間の尊厳を、命も抹殺する怖さにあります。そして平和とは命が守られていることと話していました。広島を訪問し、そのことをとても強く感じました。派遣事業に参加させていただき、関係各位の方々に深く感謝申し上げます。

